

ガマル・ヒムダーンのこと

板垣 雄三

先ごろ、ある国際賞のために、受賞候補者の推薦について意見を求められることがあった。そのとき、すぐ私の心に浮かんだのは、エジプト人ガマル・ヒムダーンの名である。もっと適当な人物がほかにいるのではないかと考えもしたが、思案すればするほど、最初にひらめいたガマル・ヒムダーンという存在が私の頭のなかで膨張してゆき、とうとう、指名すべきはやはり彼だという確信が固まってしまった。

「エジプト的性格」という論題に私はながらく付き合ってきた〔『歴史の現在と地域学』（岩波書店、1992年）〕から、ガマル・ヒムダーンの仕事にはずっと関心をもちつづけてきたが、なぜか彼とは直接会う機会がなかった。ただ、いつか、どこかで会えるだろうという気がしていた。なんとなく「孤高の人」という印象を勝手に思い描いていたこともある。気軽に近づいて、思案に沈潜しているであろう彼の生活に邪魔を入れるのは悪い、という遠慮がはたらいたのは事実である。大著『エジプト的性格』が発散する「全体知」の深みと掘がりの雰囲気、著者のイメージを、異色の地理学者どころか、暮らしぶりの詮索など許されぬ雲の上のマエストロに仕立てあげていた、ともいえよう。エジプト人の友人たちは、彼がどこに住みどうしたら会えるかについての情報を教えてくれなかった。私もあえてそれを調べようとはしなかった。

そんな歳月を経てきたのに、急に事情は変わる。問題の国際賞候補者に彼を推薦するとなれば、彼について世俗的な個人情報を提供しなければならないからである。

日本でガマル・ヒムダーンを熱心に紹介してきたのは、東京外国語大学の奴田原睦明さんであ

る。〔『東京大学東洋文化研究所紀要』第84冊（1981）所収の論文「エジプト的性格の一側面について」〕。『エジプトーその国土と人々』（帝国書院<世界の地理教科書シリーズ15>1979年）の訳者解説。著書『エジプト人はどこにいるか』（第三書館、1985年）〕。私はさっそく奴田原さんに相談した。高野晶弘さんが所蔵する人名辞典のおかげで、ある程度のデータが得られた。1928年2月4日カリューピヤ県生まれ、48年ファード1世大学（現カイロ大学）卒業、53年英国のレディング大学から博士号取得、カイロ大学の教職（地理学）につき、助手、助教授、教授と昇進するが、63年研究に専念するため辞職。王制が倒れて帰国し、社会主義が喧伝されるなかで大学を去った人なのだ、ということはわかったが、しかし、肝心のアドレスや電話番号はわからない。

そこで、エジプトの知人に調査してもらうべく、その仲立ちを日本学術振興会のカイロ・センターに派遣されている一橋大学の加藤博さんにたのむことにした。わが家のファックスが流しだした加藤さんの返事を夜明け前の薄明かりで読んで、私は息をのんだ。ガマル・ヒムダーンは亡くなっていたのである。不慮の事故であった。彼は93年4月17日、独り住まいの自宅で、台所のガスもれの火を浴び、65才の生涯を閉じた。エジプトのマスコミも知識人たちも大騒ぎで、加藤さんは新聞雑誌の関連記事の切り抜きを作ったとのこと。「私も、敬意を表すべく、彼のアパート（ドッキー地区のサグト邸のすぐ近くです）を新聞で知って、そこに行きました。」と、加藤さんは書いていた。私の指定するエジプト人に連絡をとるまでもなく、ガマル・ヒムダーンの生前の居所をすでに知る加藤さんには、私の依頼の意味

がはじめ呑み込めなかったのだろう。「そこは、今は、無人で閉鎖されているはずです。」・・・彼の死は早すぎた。私は無念の涙をのんだ。

ガマール・ヒムダーンは、エジプトをナイルの水にはぐくまれる植物に見立て、ナイルの岸辺を茎、デルタを花、ファイユームを蕾にたとえてみせる。水源から流れくだって地中海にそそぐナイル水系は、エジプトに反砂漠性と豊穡をもたらすが、それは同時に、中心的権力の専横とそれへの屈従をしいられる農民の心性の屈折とを絶えず生みだすことになった、と彼はいう。自然と人間との関係を考察し、環境・生態と社会の精神史とに架橋する彼の洞察は、近代を貫く「エジプト的性

格」論争に新しい視野をひらくものであった。それは、地域の、またその社会・文化のアイデンティティを根底的に問いなおす仕方を模索しつつ、するどい文明批評と未来志向の文明戦略とを提起していた。文明発祥の地に根をおろすこの透徹した知性に対して、これまで日本の社会はほとんど注意を払うことがなかったが、科学と哲学と芸術とを統合しようとする彼の境地は、おそらくこれからその衝撃性を証明していくのではないだろうか。ついに見ることのなかった彼の身体がナイルのほとりで土に帰していくことを知った今、私は痛切にそのことを思う。

(いたがき ゆうぞう 東京経済大学)